

「おかえりヴェンデッタ 紹介文」

岡和田晃

吉川良太郎の『エクリップス・フェイズ』小説「おかえりヴェンデッタ」をお届けしたい。

吉川良太郎といえ、21世紀日本におけるポスト・サイバーパンクのメイン・プレイヤーの一人として知られている。映画『マトリックス』の熱気がやまず、批評誌「ユリイカ」でニール・ステイヴンソン特集が組まれた頃……吉川は『ペロー・ザ・キャット全仕事』で華々しくデビューした。

大学院で悪の思想家ジョルジュ・バタイユの哲学を研究していた吉川は、美意識に裏打ちされたゴシック・ノワールの素養をふんだんに活かし、『ボーイソプラノ』や『シガレット・ヴァルキリー』など、近未来フランスの架空の暗黒街での蠱惑的なアクションに満ちたサイバーパンクを次々に世に問うていく。その背景には、ジョージ・アレック・エフィンジャー『重力が衰えるとき』の多大な影響がうかがえる。

その吉川が満を持して『エクリップス・フェイズ』とコラボレートしたのが、この「お

かえりヴェンデッタ」だ。火星の酒場で古いシャンソンが流れる冒頭から、両者の相性がぴったりだということが伝わってくる。(大破壊) 前の芸能人を模した義体など、いかにもありそうな話だし、語り手と「少年」との時間を越えた対話は……。例えば、世代を超えた壮大なストーリーで知られる『ドラゴンクエストV』を連想させる深みがある。また、少年の背景については『シガレット・ヴァルキリー』のシモーヌにも通じるかもしれない。

そして、バタイユに学んだ「低い唯物論」の美学が存分に発揮されている。リーダビリティの高い作品なので、これまで『エクリプス・フェイズ』を知らなかった読者の方も、ぜひとも手にとっていただきたい。

吉川は、映画『エヴァンゲリオン新劇場版：序』、『エヴァンゲリオン新劇場版：破』に脚本協力として関わり、またコミック『解剖医ハンター』の原作をつとめるなど、映像方面でも活動の幅を広げている。最近では『SF JACK』に収められた「黒猫ラ・モールの歴史観と意見」が好評を集めた。